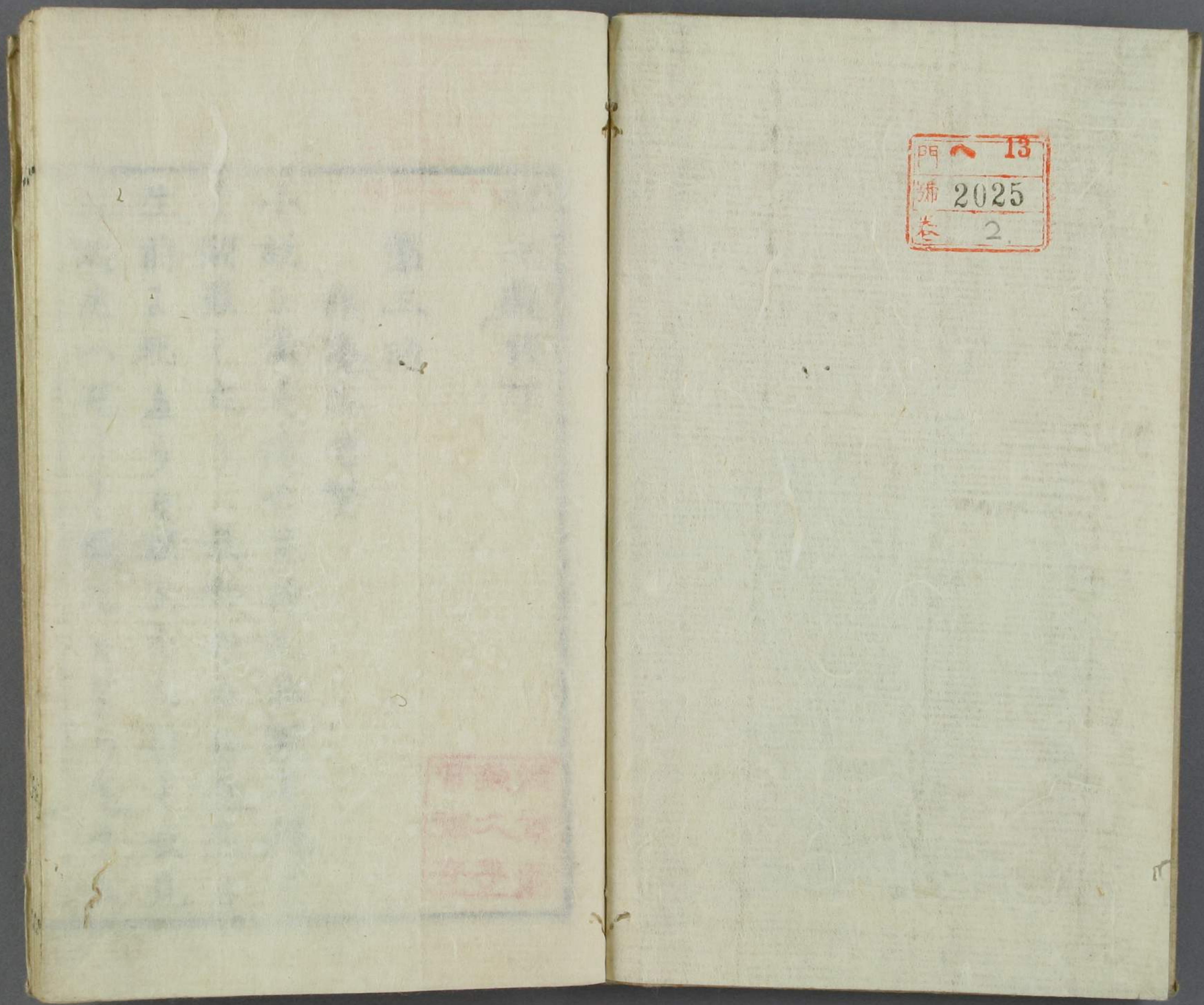


特
~遠13
2025
24





明 13
册 2025
卷 2

明
册
卷

妙々戲談下



第三回

膳庵説音賢

小説に載る牙の范仲捨蔡襄と死し
く閻羅と成り我邦の白石先生も
生前に死なむらむ閻王たらむと云北
三先生ハ死し々魔王とあらんや云



ハれしとやかる豪邁の人の英灵ハ
千古も消滅せず故に清澆末の体を
見られぬを聖学の衰るを悲し
射利賣名の徒を惡まる勿論成
へし今日冥府乃廳堂にお合せし人
々栗三先生を始し免其宅の諸先生
坐定りし時は往年世より時妙々
奇談蝸牛の戦ありし面々を有され

る顔見合て有りしとは三年以前世
を去し膳庵先生進み出られて中さ
る某北三の門人ふし久しく
諸先生の際小周旋せしが先年周滑
平か妙々奇談を著しき当時噪名の
諸先生お様々批判し甚物騒しき
折ある某斗衆議りもき獨り觀して
嫌機よりりさるる留試尔身意を陳

へん奇談前編に擧る負石良雄此靈
宝才か仙岳さの碑文を説破一釋尊
も志仏か佛の字を咎免あひ米芾も
山亥の昏法を知す一俗心有るを
誹り紫岩ハ父趙の画を賣物小せり
とを誥り此今以席小阿る栗三先生
と五三の詩話ニ入られ一取止とを
為る其非を揚らまされ其実を砭針

苦藥よ一と學者の眠氣覺一とも云
魚一さきき論中中々已が田為引
水有く作者も尻尾を尾出さき激論
蜂のぬく起り夫かお次て肝煎鍋あ
れも鑄か鍋ありされと也変り星
移て宝才志仏も五三父趙もかく云
某と今も泉下の客やあり一旦鋒我
握りぬ々洵々と互に長を争ひ短を

議したるに実小泡沫夢幻南柯一炊
ふれハ今爰小論すへるに扱子眼一
同笑止なるるをせよ在る先生達ニ
孔夫子も來者の今よ如きるを知ら
すと仰所き昔以まも學業人物ニ
あら下里已に妙々奇談小尼へたる
寛才志佛等も石湖放翁が餘唾をた
免生語多しと誹られても寛才志佛

が見る所も宋元の名家なり清よ
そも青邱初白愚山丹勒杯といふ大
家あり今詩人の作家のと仰がれ
實を志仏五三の糟をな免其奴隷と
なり羞むるを知らぬ徒も有り北三
金城等考核自ら任として揚弁庵顧
炎武間苦瓊朱竹垞毛大可らの考證
學を踏臺とし勤王師九經談杯の作

有て博覽雄弁一を壓倒し後生を
風靡せしも世の人を尚許さずして
旁通多識ふ誇るまゝして誠意修身
のるる爪先何どもありと云へり
某と孝經私記や學大識を著せ
ハ野暮りて此偽君子のと云われ經
書の著述ハ人々振むきもせぬ何ぞ
賣れる若く有まは是を出し多ら

何程入銀が付と狡猾なる昏肆と
計り又作料あら何ほどと云ふ肝要
儒者さへみはしましき技藝ふ於て
とゞし時り菱胡先生ころへりぬ
膳庵先生を推のちて某山友に一議
論ありと例の酒氣氛々として談
られ多り

第四回

菱胡誥山亥

米翁一夜趙松雪仇十洲の画を展觀
しちやむつかしれやを免様が有
ろふと思案最中忽然と卷大人來臨
あり曰足下ハ名家の後よりて父子
二代文苑ハ名を噪しふせり天幸羨
魚一某杯也を去ては足下一人生殘
て老輩と仰がれて射利の心今もや

まぬを栗三先生を始し免足下の
大人寛才先生とも羞思ふ処ハ先年
周滑平が米芾ハ足下を説せしを跡
乃犬盜を吠るは同一ハ翁もよく人
の物を攘むと謝聲漸も云へり或時
天子召しし字文茂書せられしは
端溪の硯一面袖の下へかくして盜
に又蔡魯公が右軍の肉筆を得て珍

重せしお取逃をいられとを是を以
て其人と為り知へし書は心の畫也
とく古人も字を清心謹嚴よりて書
きと云へるは米芾の書をかくふハ
衣を解き帯を脱し赤裸なる守官
の前くも其落魄を改す又用ふは頑
石に遇へる必を束帶整冠しと拜を
と宝繪録に足るあり氣違同様赤裸

ふく字おかくと云教をすす物を盜
む米芾を敬慕する足下の心術合点
ゆり米芾文公ハ曹操の帖を習ハれ
し故漢の篡賊を師とするの譏あり
趙松雪も勝國の四象と称せり勝國
の字殊小蓋へし書ハ小道や以へ共
人物を以て先とし足下杯の不学の
目ふて右軍を曲水は勝を浮へ流

連まゝ洒落才人と思ふへくまきぢた
小非を平生の行事骨鯁まゝ進用
ま屑々たらま直言激切畏避まゝ所
まよく貪を賑し施を好く上疏まゝ
を争ひ内官ま阿順せま唐の太宗稱
して晋室第一流の人物とま只書名
の為に掩をまま人ま善行遺烈有る
を知らま夫晋室の政さらま見るへ

まきまゝくま後世晋寶政と稱するま
のま右軍の書を以てま夫を米芾
が取て已ま各室の号とま晋宝齋
まどつまハ僭竊まらま足下の子弟
ま教ゆるま巴の畱のみ故門人一箇
ま一家の書体をます者ま虞褚歐
柳皆右軍を慕倣まれま能脱然と
て自家の體を成せり足下の社中

て同才を儒家に一家を成し多き才
とわく時好ぶ目が付て書風界し余
か門をり出し正塘や周岩も其力を
らもして一家の流をなせ故に書風
大以て下き才志を卑しとせ其某
以て我辭してより田舎漢をも少し
筆才有若く菱胡風に真似おせり
る寔に笑へし我らを儒者のなりや

ふぬ小く宝才姻是り多親し氣習自
高く晋唐以下小八目を注せす今此
書家達をえりよ淳才梓三研才杯を
し免足下の書風をかくと譬八人の
畠へ物を種ると同一各名をなす
艇才や樗苑女流くも雲方玉焦等ハ
古人を師とし今人の門牆中々立
る足下の賢息遂案や陵瀨の父の真

似おせらるる笑小堪たると云時
三亥顔をぢむ常く死んでも癩症も
止ぬソウダ

第五回

華三議琴大

華三先生は在り日琴大や旧知
今冥府に於く栗三先生を始し免諸
先生達の高論を以て氣の毒ありと

一日柳島にふりお見へると曰某は
在時の交を思ひ忠告するの一条
有り諸先生達の議せらる趣ハ枝藝
も先を以て今儒を以て業と一大家
の負をいながら甚しき悪評あり夫が
為し文人の遊歴しても穢またるの
徒かと思はれ著述も段々六つかく
みるは是文人一同の迷惑よ

春秋の法足下を攻を免れを当時金
城膳庵が死してより博覽旁通已が右
ふ出る者なりと自負の心あり人を
よもや昔の手も有まひと思の外
利心弥増して同氣相應をる所より
銀奚杯と臭味を同一煎肝鍋の月番
附ふとを放るよひき夫小あまされ
て書画会を催す小駕籠代杯とやる

馬鹿者も有る以前本屋は食客一
て書目や直段を能覺へかや雀や云
く小舟杯の悪評を兼て合点ふて
詩にも寄語鷹鷗休迅擊鳧元不競
翱翔と作りながら怒る目のなほ処
禁をおかして正人君子は齒せられ
愚の甚しきふ非らむや昔隣子平
を著述に依る罪を得たれ其國の爲

に在るの赤心より出く利の爲ふせ
ぬ故今ふて光輝有り学者ハ皆足
下のみきそのと子眼一同世の人よ
思ふも嘆息し堪多り扱又足下の文
章を見るも規格体裁相応せぬと甚
ぬ一二爰ニ論してすせん妙々奇
談し負石良雄の灵宝才が文を誥り
しと世の人知る処ふし先文章

を作るやうに入の徳業事具を詳し
し古人の肺肝を得るを要し然る
は只人此耳を驚し切落しのみき様
小斗り目を附るれお応せぬなり極
苑が義士賛詞の序文よ迄松繁次を
引證しと呼曰忠臣庫自此而降不特
良雄等四十七員姓名益顯于世亦使
海内候伯嘆嗟于赤木候得士之盛迹

馬と昏しを寔小笑し堪くを狂言綺
語に依く海内の候伯が赤木候の士
を得るを知ることを不倫の論りしを
不敬之夫赤木ハ大藩の支族ふく仇
家も亦大諸侯の後指有て其關係を
る処甚大なる
苗堂於ても宗室の歴々より諸有司
を種々討論商考ありしをあり夫

を河原どのの作者ある近松杯を引證
し義士とも當らぬ忠臣てお当多
とも甚しき誤り義理の當否を考
へ古人の是非を討論するも學者の
尤も心を用へお処にて元禄以來の
諸先生見る所異同有て議論喧しか
りし近頃北三の義士雪寛出て紛
々の論止ぬ九巢先生の義人録と昏

まゝに流石先生の卓見ふゝゝ義士
等も地下に面目あり夫良雄始免忠
臣ふるゝ何ぞ論を俟ん其禄を食ん
て其君乃為る死を士大夫の常より
く良雄らが舉止の最以て嘆羨する
斯る官家我輩尚たるの意殊に厚く
事不敬はたさるる故主の素意は背
くを示し讐人を獲るも尊界の礼を

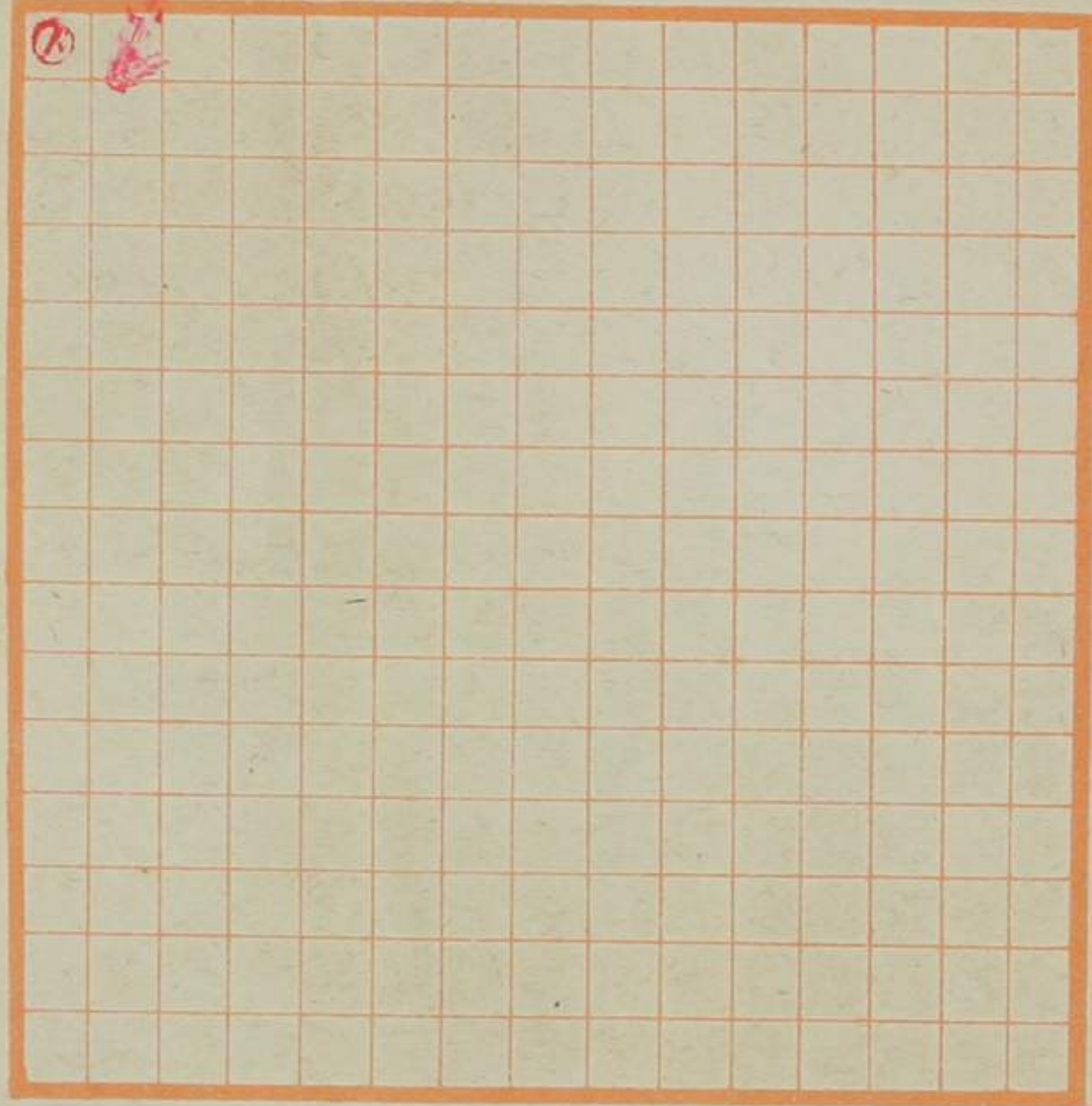
守り志を遂るの後自ら首して官裁
を請ふ其進退周旋尽く其ふ称へり
爰に於て主家も亦異日再ひ血食す
是を以て義士の稱寔に当たり足下
も元より凶園黨の才一と田舎をも
穿へし其才を河原若をヒイキせら
るゝと成る良雄等が正大の心術は
くハ取あも足らぬ狂言操りなもて

をさきと四十七人の面々悉く蓋
る処あり樗苑を典故り精しく
一議も及むを此様を序を載する
る酒を酔たるる詩を足下枕三胡山
はハ及ぬと合点なき世主税の長篇
論をへき所甚あり茶奚ハ又筵小顔
を出さぬ人なれども題詞頗る余韻
ありト云時琴大欠伸しくて金づね

し以

余今茲孟春ニ毛を遊し都下又
人の悪評ある処ある小甚喧し
儒者と稱し孔子の教を説き
るが如きの孔子に蓋是より大
なるものなりさき都下の又入連
豈尽く汚行の徒ならんや只一二
狡猾の徒の爲ふ一口子声を誹し

3年10月



らるる嘆を爲し本篇妙乃奇談
口お極く時輩を誹る徳行のり小
非らも余豈糸を好んや止事を爲
ましては戲談あり世の正人君子
の爲よしく罪を獲るは敢て辭せ
すト緑野の客舎と題す

らるる嘆を爲し本篇妙乃奇談
口お極く時輩を誹る徳行のり小
非らる余豈糸を好んや止事を爲
ましては戲談あり世の正人君子
の爲よ〜〜罪を獲るを敢て辭せ
すト緑野の客舎と題す

